

平成 14 年 4 月 8 日

## 立教大学キャンパス景観「公共の色彩賞」受賞 赤レンガの趣が周辺地域の街づくりにも波及

公衆の眼に触れる外部環境の中でも、特に環境色彩に優れたものに贈られる第 17 回「公共の色彩賞」10 選のひとつに、「立教大学キャンパス景観」（西池袋 3-34）が選ばれた。「公共の色彩を考える会」主催による同賞の募集（13 年 10 月）にあたり、豊島区が推薦者として同景観を候補対象として申請し、今回の受賞となった。

立教大学キャンパスが現在の西池袋の地に建設されたのは大正時代である。学生で賑わう立教通りに面した大学正門を入ると正面に時計台を持つ本館、右に礼拝堂、左に図書館旧館が中庭をはさんでコの字型に配置される校舎群は、赤煉瓦造りのゴシック様式。特に本館は、ゴシック様式の中でも、その山型の窓や木造小屋組みの形に見られるように 16 世紀に英国で成立したチューダ様式を採用しており、東京駅とともに、日本を代表する大規模煉瓦建築のひとつに数えられる。歳月の中で蔦に覆われたそれらの建物群は、重厚かつエキゾチックな雰囲気醸し出し、学内のみならず地域のシンボルとして親しまれている。本館、礼拝堂、図書館旧館等 6 棟は東京都選定歴史的建造物に指定されている。

立教学院・立教大学は、近年、教学発展のためキャンパスの再整備を行っているが、地域のアメニティ形成の一環として、こうした歴史的な建造物を保存活用しつつ、建物の建て替え及び外構整備に際しては、区とも協議を行いながら周辺の街づくり整備との調和を図っている。特に平成 13 年には、校舎外周のコンクリート塀が撤去され、赤レンガ造りの校舎群と調和する開放的な外構整備がなされた。大学の建物群が街並みに顔を出すデザインで、まさに開かれた大学にふさわしい変貌を遂げている。また、こうした景観は周辺地域にも波及し、商店街のレンガの歩道や、周辺地区の町並み整備の基調になるなど、大学構内と周辺地域が一体となった都市空間が形成され始めている。

こうしたことから、区では平成 14 年 1 月、都市景観形成への貢献を表し、立教大学に対し感謝状を贈呈した。さらに歴史的建造物の色彩と調和した都市景観を広く知らしめるべく、区が推薦者となり第 17 回「公共の色彩賞」に応募、今回 10 選のひとつに選ばれる栄誉を得た。

受賞決定は、4 月 6 日（土）、有楽町朝日ホールにおいて開催された「公共の色彩を考える会・20 周年シンポジウム」において発表された。10 選の事例の中でも、「立教大学キャンパス景観」は周辺地区の街並み整備にまで波及していることが高く評価され、審査委員から「大学と行政と住民とが、みんなこのキャンパスを地域の財産として大切に、そして誇りに思っている事が分り、公共の色彩賞のお手本とも言える事例だと思う」との講評が与えられた。

また、立教大学では「立教大学は築地から池袋にキャンパスを移して 80 余年になりますが、大正、昭和、平成の時を経た建物が教育・研究の伝統に培われ一体化するようなキャンパス整備に取り組んできました。そして、地域との調和のとれた開かれたキャンパス作りにもつとめてきました。これからも伝統を継承しながら新たな発展につながるようなキャンパス整備を社会とともに進めていくつもりです。わたしたちの取組みが高く評価された今回の受賞に大変うれしく光栄に思っています。」と受賞の喜びを表している。

**詳細：都市計画課長、立教大学広報渉外部広報課長**